

北房町埋蔵文化財発掘調査報告 6

山之城古墳群

1987年12月

北房町教育委員会

序

本書は、北房町大字五名の山之城古墳の発掘調査報告書であります。

小高い丘陵上の古墳に立って南面すれば白鳳時代の英賀廃寺跡が、南西方面には縄文時代からの遺跡のある谷尻を指呼の間に望むことができます。この古墳の主は谷尻周辺の縄文期先人の営みを知っていたであろうか、堂塔伽藍の英賀寺建立を予見していたであろうかなどの想いに駆られます。

昭和49年9月中旬、中国縦貫自動車道北房インターチェンジ周辺に倉庫建設のため開発したいと大日興業株式会社より北房町教育委員会へ申請書が出されたため、確認を行ってみると古墳群が確認されたので県教育委員会との協議により3基を発掘調査することとなりました。

このため町教育委員会として調査委員会を組織し、県教育委員会文化課下澤公明主事により昭和49年12月23日から昭和50年2月21日の間に発掘調査が行われました。

調査は、大日興業株式会社の経費負担により進められましたが報告書の発行までには至らなかったため、町教育委員会として報告書を刊行することとしました。

発掘された遺物のうち、2号墳第1主体部が県立博物館で復元展示されています。

本書が埋蔵文化財の、そして古い歴史と文化の香りが高い郷土理解の一助になれば幸いです。

おわりになりましたが、調査費を負担してくださった大日興業株式会社、調査にあたって終始ご指導ご援助くださった岡山県教育委員会文化課、岡山県古代吉備文化財センターをはじめ関係各位並びに寒さの中で発掘作業に従事していただきました方々に心から厚くお礼申し上げます。

昭和62年9月

北房町教育委員会

教育長 武 村 邦 夫

例 言

1. 本書は、大日興業株式会社が^{じょうほうぐんほくほうちょう}上房郡北房町^{ごみょうやまのじょう}大字五名字山之域にトラック・ターミナル建設するに伴い発掘調査を実施した。
2. 発掘調査は、北房町教育委員会が実施し、岡山県教育委員会文化課が現地指導した。
3. 発掘調査期間は、昭和49年12月23日～同50年2月22日までである。
4. 発掘調査は、岡山県教育委員会文化課職員下澤公明が担当し、地元有志の方々及び北房町教育委員会の協力と援助を受けた。
5. 報告書については、昭和50年度中にとの予定であったが、原因者である大日興業株式会社の事情により今日にいたっていた。
6. 本書の作成は、岡山県古代吉備文化財センターにおいて下澤公明がおこなった。
7. 挿図中の高度値はすべて海拔高であり、方位は第1図が真北で他は磁北である。
8. 第1図は建設省国土地理院発行の25,000分の1地形図「砦部」（昭和60年2月28日発行）を複製したものである。
9. 出土した遺物および実測図、写真等は岡山市西花尻1325-3、岡山県古代吉備文化財センターに保管している。
10. 2号墳第1主体部は、復元され岡山県立博物館において展示資料として保管されている。

本文目次

序

例言

第1章 調査の経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	1
第2章 地理的・歴史的環境	2
第3章 調査結果	4
第1節 1号墳	4
第2節 2号墳	11
第3節 8号墳	15
第4章 まとめ	18

挿図目次

第1図 周辺遺跡分布図 (1/25000)	2
第2図 山之城古墳群地形測量図 (1/400)	4
第3図 1号墳々丘断面図 (1/100)	5
第4図 1号墳主体部 (1/40)	6
第5図 1号墳出土遺物 (1/3, 1/5)	7
第6図 1号墳出土遺物 (1/3)	8
第7図 1号墳出土遺物 (1/3)	9
第8図 1・8号墳出土遺物 (1/3)	10
第9図 2号墳々丘断面図 (1/100)	12
第10図 2号墳第1主体部 (1/40)	13
第11図 2号墳第2主体部 (1/40)	14
第12図 2号墳第3主体部 (1/40)	14
第13図 2号墳第1主体部出土遺物 (1/3)	14
第14図 8号墳位置図 (1/2000)	15
第15図 8号墳 (1/60)	16
第16図 8号墳出土遺物 (1/2, 1/5)	17

図 版 目 次

- 図版 1 上水田盆地を望む（南西から）
- 図版 2—1 八幡町附近を望む（西から）
2 1号墳調査前（北から）
- 図版 3—1 1号墳主体部（南から）
2 1号墳主体部蓋石除去後（北から）
- 図版 4—1 1号墳第1主体部石枕（俯瞰）
2 1号墳剣出土状態（俯瞰）
- 図版 5—1 2号墳主体部（南から）
2 2号墳主体部掘り方（南から）
- 図版 6—1 2号墳第1主体部（南から）
2 2号墳第1主体部蓋石除去後（南から）
- 図版 7—1 2号墳第2主体部（北東から）
2 2号墳第2主体部蓋石除去後（南東から）
- 図版 8—1 2号墳第3主体部（東から）
2 2号墳第3主体部蓋石除去後（西から）
- 図版 9—1 8号墳遺物出土状況（北から）
2 8号墳石室（北から）
- 図版10—1 8号墳遺物出土状況（俯瞰）
2 8号墳遺物出土状況（俯瞰）
- 図版11 出土遺物（1）
- 図版12 出土遺物（2）
- 図版13 出土遺物（3）

第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

山之城古墳群は、上房郡北房町大字五名字山之城に所在する。この山之城古墳群の所在する丘陵約6,166㎡にトラックターミナルを建設することに伴い、事前の発掘調査について北房町教育委員会から文化課に協議があった。当初の計画段階においては、明らかに1号墳が用地内に存在することから計画用地内から外すよう協議を重ねた。その過程において現地立会した結果、遺跡地図に記載されていた1号墳については、地表観察では確認することはできなかった。しかしながら、1号墳の南に明確に墳丘と判断されるものが所在することが確認されたのである。そして位置的には、計画用地内のほぼ中央にあたることが明らかとなった。

従って、計画用地内の中央に位置する古墳を保存することになれば、この計画を大幅に変更しなければならず、最悪の場合は、計画そのものの撤回という事態が予想されたのである。このような協議の過程において、北房町教育委員会からこの工事の施工のさいに出る土砂を中国縦貫自動車道路の土盛に用いることになっていることが明らかにされた。この件については、道路公団津山工事事務所に問い合わせた結果、山之城地区の造成工事において出る土砂について土盛工事の予定の土砂として予め計画しているとのことであった。さらに、現在（昭和49年時点）発掘調査が進んでいる中国縦貫自動車道建設に伴うものと同様に取り扱ってほしいとの要望もあった。

以上のような経緯により、発掘調査は、北房町教育委員会が実施し、岡山県教育委員会文化課職員が現地指導することとなったのである。

第2節 調査の経過

発掘調査は、昭和49年12月23日から昭和50年2月22日の間に実施された。

現地立会の時点には、明らかでなかった1号墳について墳丘上の枯草等を除去後に第3主体部を検出した。このことで協議段階でのそれと理解された。しかしながら、古墳の名称については、当初から明確な墳丘を有するものについて1号墳とし、前者については2号墳とした。

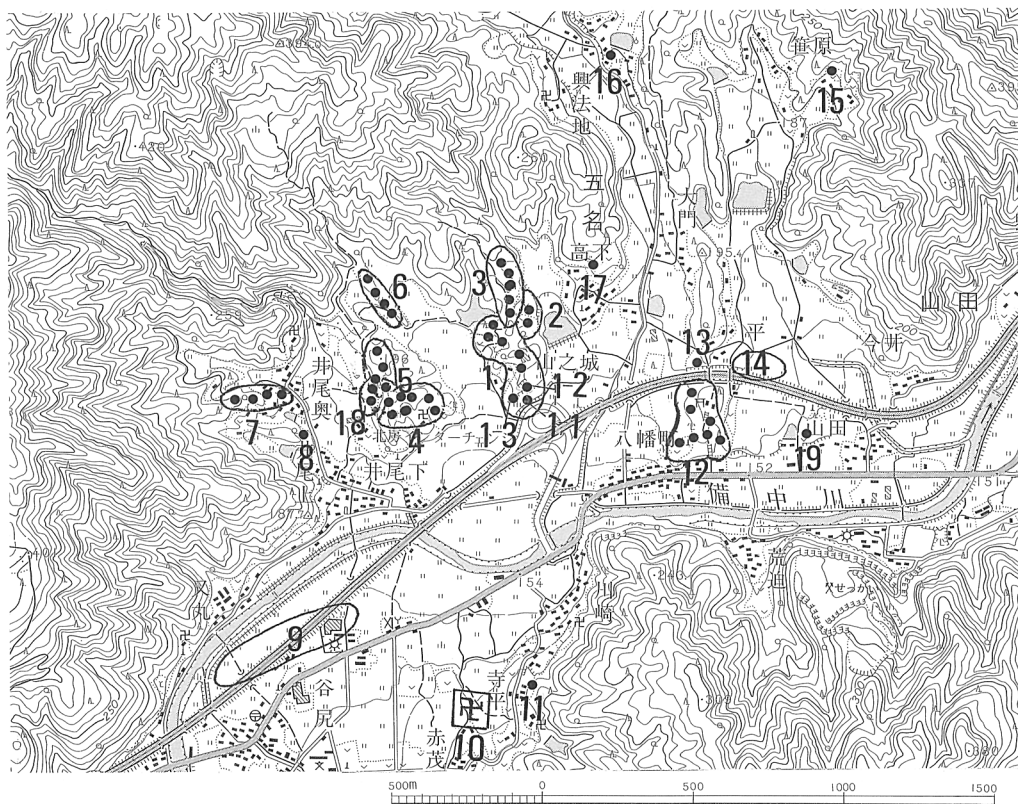
8号墳については、協議の過程で全く問題になっておらず、その存在すら認識されていなかったものである。調査中に、斜面部に石材の散乱している地点が認められたことから確認のトレンチを設けた結果、8号墳の存在が明らかとなったのである。

第2章 地理的・歴史的環境

1. 地理的環境

上房郡北房町は、岡山県の北西部に位置する。南は同郡の有漢町、西は高梁市と新見市、北は阿哲郡大佐町と真庭郡勝山町、東は同郡落合町に隣接している。1953年に中津井村、上水田村、水田村が合併して北房町となった。

丘陵は、新見市南部を占める阿哲台に続く石灰岩台地の上方台が広がり、石灰岩溶食地形が多く見られる。平地は、北房町の中央部を中津井川と備中川が開析した、かなり広い盆地を形



第1図 周辺遺跡分布図 (1/25000)

- | | | | | | | | |
|----------|------------|------------|--------------|------------|----------|-----------|----------|
| 1 山之城古墳群 | 1-1 山之城1号墳 | 1-2 山之城2号墳 | 1-3 山之城 | | | | |
| 8号墳 | 2 高下古墳群 | 3 広高下古墳群 | 4 観現寺山古墳群 | 5 赤羽根古墳群 | | | |
| 6 長そね古墳群 | 7 塚の峠古墳群 | 8 国重古墳 | 9 谷尻遺跡(谷尻地区) | 10 英賀廃寺 | 11 赤茂瓦窯跡 | 12 八幡山古墳群 | 13 八幡山古墳 |
| 14 備中平遺跡 | 15 笹原古墳 | 16 興法地火塚古墳 | 17 大塚古墳 | 18 東観現寺古墳群 | | | |

成させている。この両河川が合流する地区においては特に広くなり、備中川が東流する八幡町附近の北から南へ細長くのびた丘陵によって狭まる場所までは、比較的広い平野を形作っている。

河川流域は旭川水系であり、東に位置する真庭郡との生活圏域が大きな比重を占めているが、行政的には高梁川水系を主とする備中に属している。

山之城古墳群は、この中津井川と備中川が合流して、備中川が東流する北側の丘陵に位置する。この丘陵と備中川に面する水田との比高は20mほどである。また、東と西には水田が入り込んでおり、備中川に突き出た丘陵である。この丘陵から南西方向には、両河川により開析された広い平地が一望される。

2. 歴史的環境

縄文時代の遺跡は、山之城古墳の存在する丘陵から南西へ約1kmのところの谷尻遺跡から、押形文と後期後半から晩期にかけての遺物が検出されている。また、中津井川と備中川が合流する地点の北側の丘陵上に所在する桃山遺跡から後期後半の遺物が出土するなど、比較的早くから生活が営まれていたことが窺われるのである。

弥生時代は前期からの遺物が認められており、前述した谷尻遺跡のように生活の場の変化はあまり認められないのである。後期に入ると堅穴住居址や墓が検出されるようになり、その後半になると堅穴住居址の検出数も多くなり、遺跡の数も増加していく傾向を示している。

古墳時代に入ると、備中川や中津井川により形成された平地の縁辺の丘陵上に多くの古墳がつくられるようになる。特に、山之城古墳群の丘陵から南西へ約2kmほどいった備中川の南丘陵上には、全長45mの前方後方墳である荒木城御崎2号墳、これと接するように全長63mほどの同1号墳が所在する。これらの古墳は、古墳時代でも比較的古い段階のものであり、周辺地域に比してより早く政治的支配が浸透していたことが窺われるのである。このように吉備高原の丘陵部にあたる当地は、備中川の東流により旭川と合流することで美作との水運が可能となり、また、中津井川から分かれた多和山峠は備中と美作との結節点でもあり、さらには備中川を北上して小阪部に達することができるのである。従って、この地域が備中国内の南北の分岐点であるとともに、東西においては美作国との対峙する所でもあったのである。このような背景をもちながら、周辺地域に比較しても遜色ない広い沖積低地ともあいまって、特色ある社会を形成していったものと考えられるのである。

参考文献

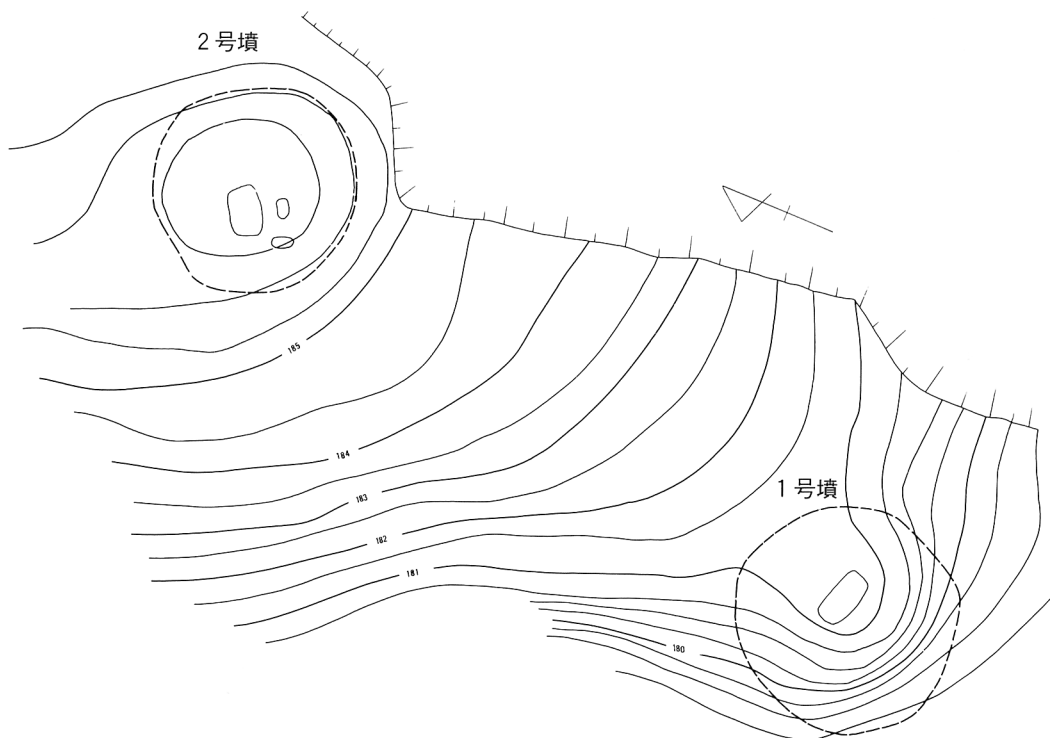
- 齊藤伸英 「中国自動車道で変わるまち」 岡山県史第1巻自然風土 1983年3月
 岡山県大百科事典下巻 1980年1月
 岡山県教育委員会「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」(12) 1976年3月
 岡山県教育委員会「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」(11) 1976年3月

第3章 調査結果

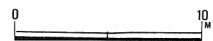
第1節 1号墳（第2図）

現地立会により墳丘と推定されたものである。トレンチの結果、箱式石棺を検出した。

規模は、南北・東西の各土層断面で認められた周溝から径約14mの円墳である。周溝は、各土層断面の北と東において、8層の茶褐色土中に黒色土として認められた。西においては黒色土ではなく、基盤層を若干掘り込んだ程度のもので確認された。盛土は、第7層の旧地表が認められたことから、約35cmを測る。土壌の掘り込みは、第2層の淡黄褐色土からである。この土層中の蓋石直上から、一部破砕された状態で須恵器の杯5と蓋3個体分を検出した。この遺物は、墳丘直下であったため、調査中に原位置を移動してしまい作図が出来なかった。なお、この周辺からは、炭化粒も認められている。



第2図 山之城古墳群地形測量図 (1/400)



主体部（第4図）

土壙掘り方は、300cm×132cm、石棺（内法）194cm×36cm、38cm、50cmを測る。東短側は平石を2枚、西短側には円礫を2つ用いて、それぞれ枕としている。西短側は頭骨が遺存していたことから、複数埋葬と考えられる。埋葬の前後関係については、石棺が東に向かって開いて行くこと、さらに副葬状態から考慮すると東頭位が当初の埋葬位置と考えられる。床面は、小礫を上面に、やや大きめの礫を下に用いていた。

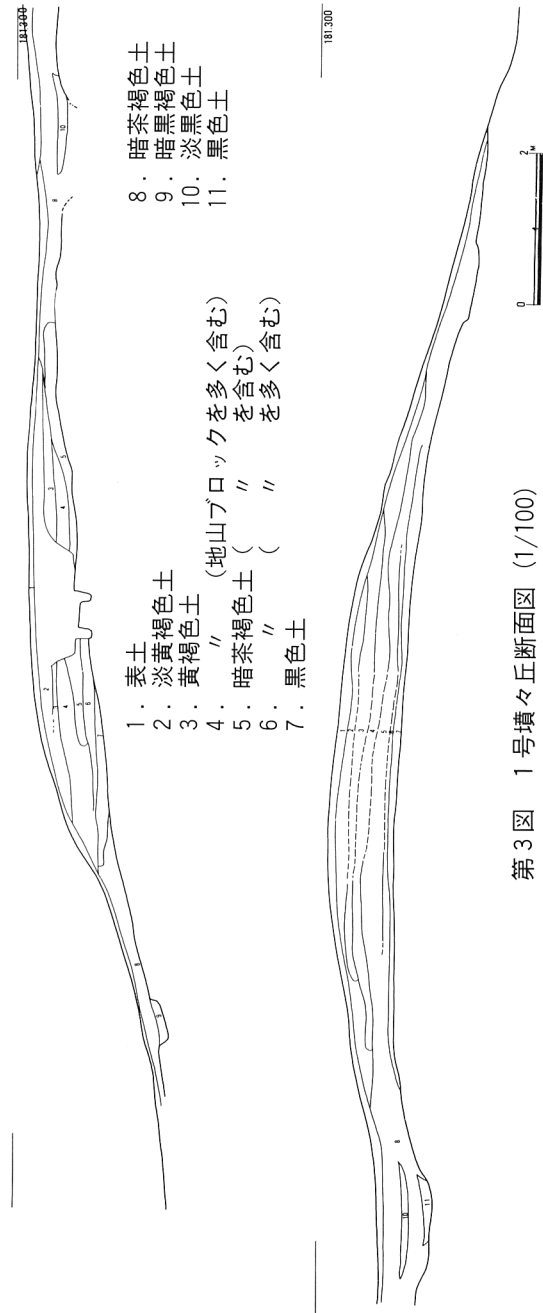
出土遺物は、石棺内に棺中央と南長側石に沿って2本の直刀が、切先を西にして検出された。また、東枕石の下に剣状の鉄器の副葬が認められた。棺外遺物は、北側石に剣が切先を西にして埋置されていた。さらに、それと相対するかっこうで鉄鏃が南側石の東よりに埋置されているのが認められた。この鉄鏃は、調査中において原位置を確認することが出来なかった。

直刀（第5図・2）

全長が88.4cm、刃部長72.2cm、茎長15.3cm、刃部幅2.7cm、棟幅0.6cm、茎部幅2.1cmをそれぞれ測る。目釘穴は、刃部よりに1か所ある。棟・刃とも直線を呈する。なお、切先よりに木質が遺存している。

直刀2（第5図・3）

全長94.2cm、刃部長77.4cm、茎長



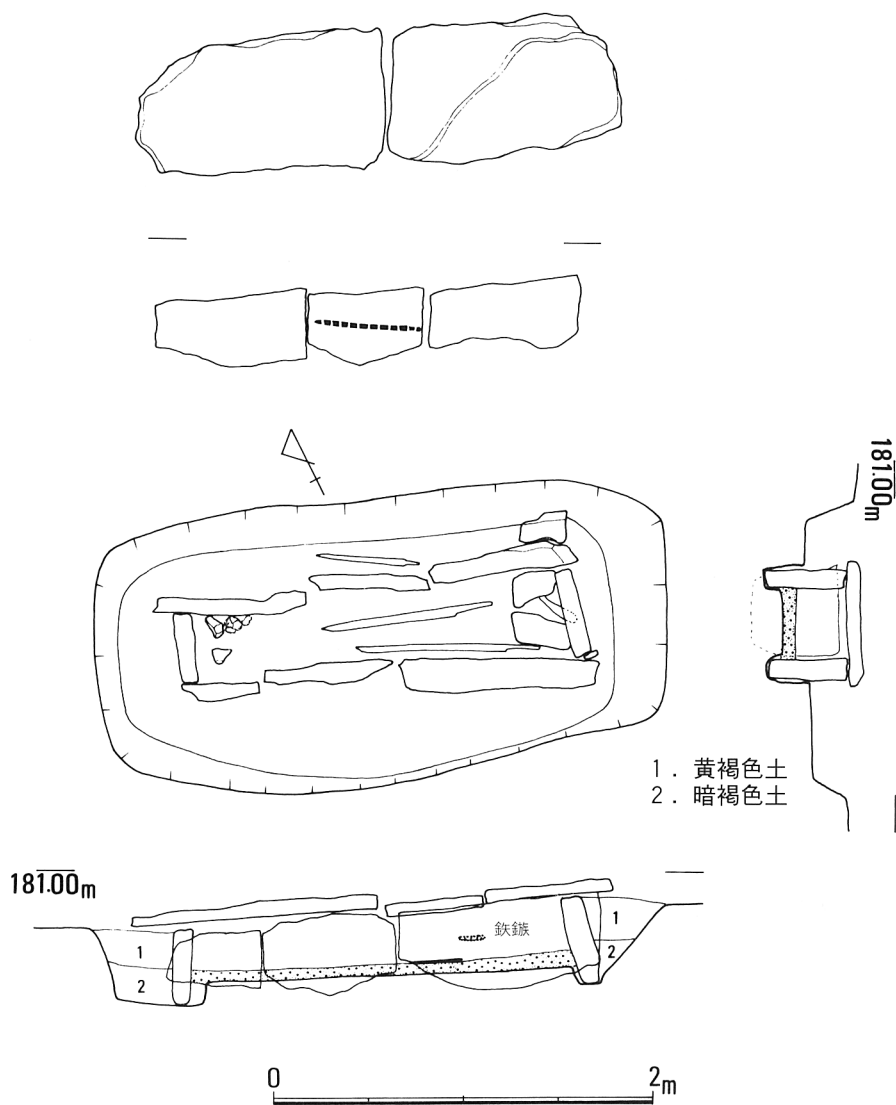
第3図 1号墳々丘断面図 (1/100)

14.1cm、刃部幅3.4cm、棟幅0.7cm、茎幅1.8cmをそれぞれ測る。目釘穴は2か所有する。棟および刃部はほぼ直線を示す。

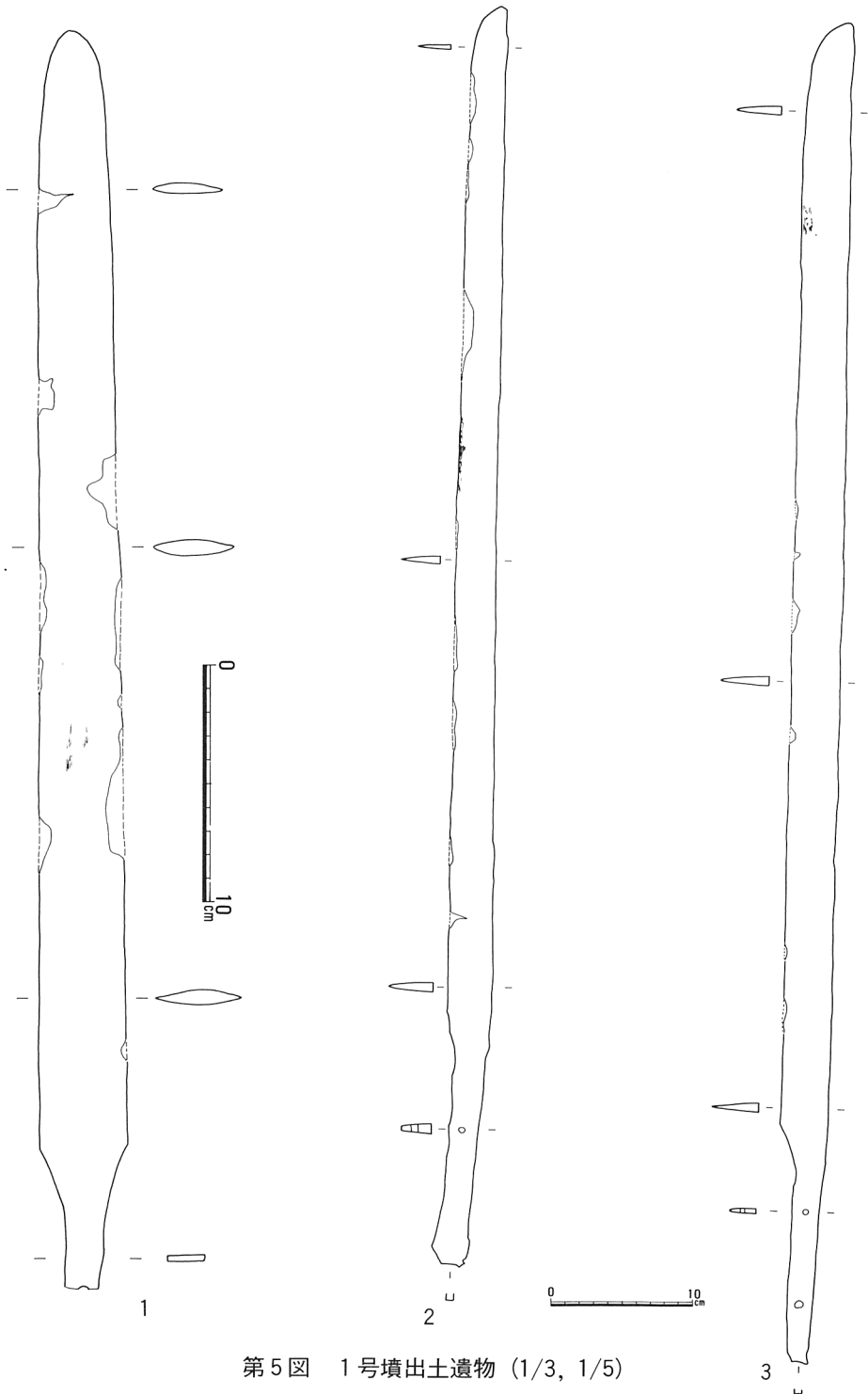
剣（第5図・1）

残存長53cm、刃部長47.1cm、刃部幅3.4cm、茎幅1.6cmをそれぞれ測る。茎部は、目釘穴の所より欠失している。鑄は認められず、身に木質が認められる。

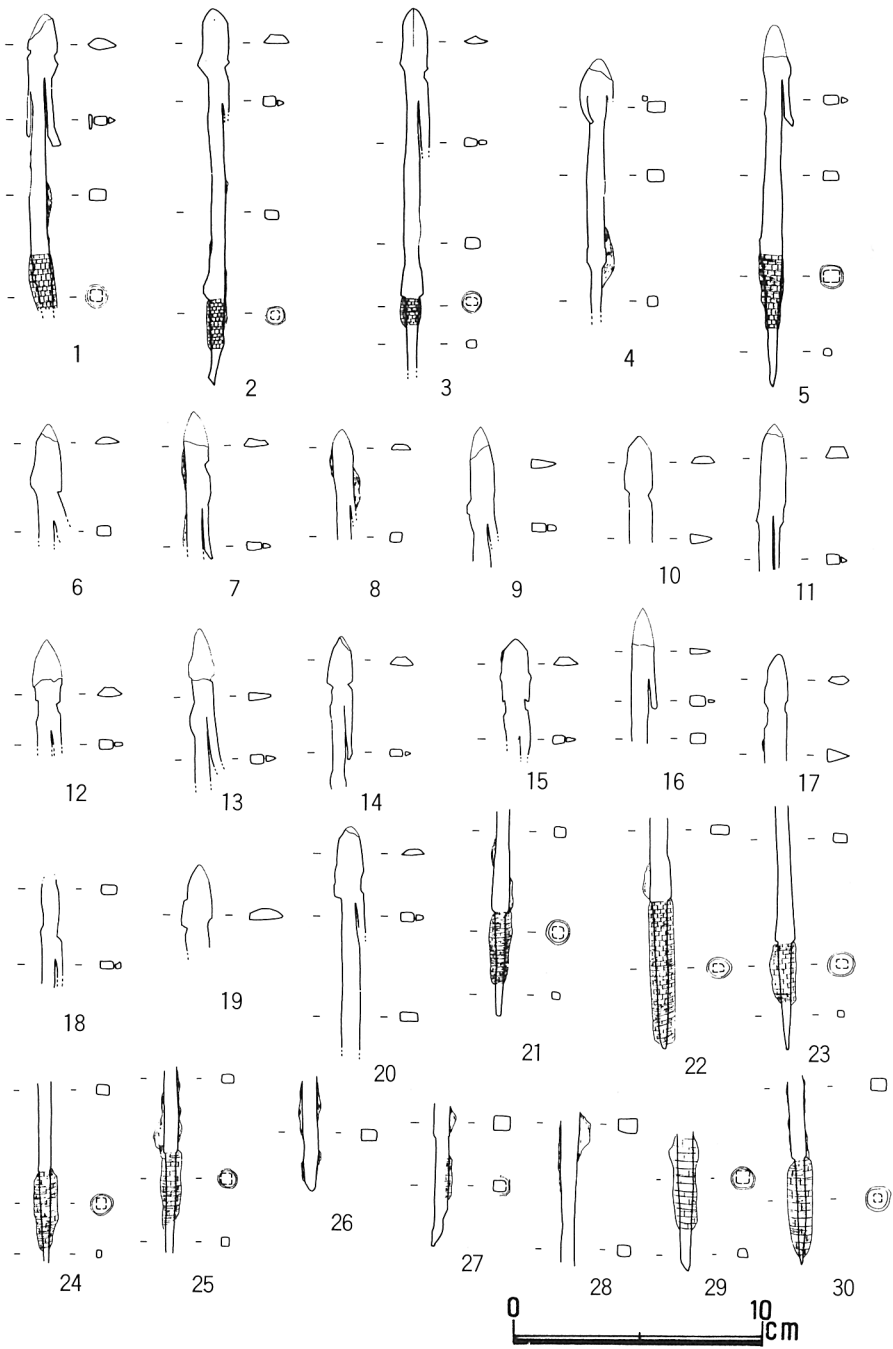
不明鉄器（第7図）



第4図 1号墳主体部 (1/40)



第5図 1号墳出土遺物 (1/3, 1/5)



第6図 1号墳出土遺物 (1/3)

現存長18.8cm、刃部幅3.5cmと2.7cmを測り、幅が狭くなっていく形状を呈する。刃部は、両側に付し鑷を持たない。切先と考えられる先端は三角形状を呈し、刃を有さない。

鉄鑷（第6図）

一括埋置されていたが、調査中においてほとんど破砕し、かつ原位置を保つことが出来なかったものである。刃部の数から約20本の一括埋納と考えられる。

検出された鉄鑷は、棘篋被鑿箭式に含まれるものと考えられる。刃に鑷を有するもの、両刃造り、片刃造りなど見られ、棘状突起を両側あるいは片側に持っているものがほとんどを占めている。茎部分には、桜皮を巻いている。

須恵器（第8図 1～8）

前述した如く、墳丘上において破砕した状態で一括して出土したものであり、他からの出土は見られなかった。

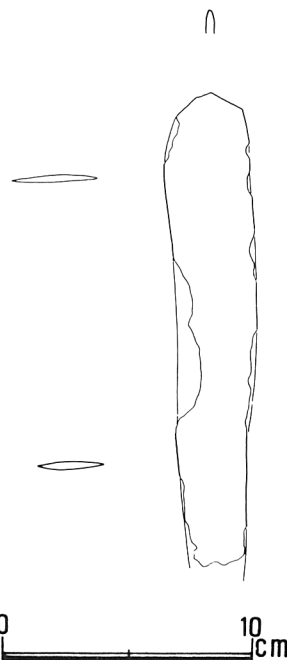
1は、器高4.55cm、口径10.4cmを測る杯身である。立ち上がりは内湾し、口縁端部は丸く仕上げている。受部は丸い。

底部は平たい面を有する。ロクロ回転方向は、時計回りと逆を示し、底部には篋削りがみられる。底部内面は、細いハケ状工具によるナデがみられる。焼成は堅緻で、色調は暗灰色、胎土はやや大きめの砂粒を含んでいる。

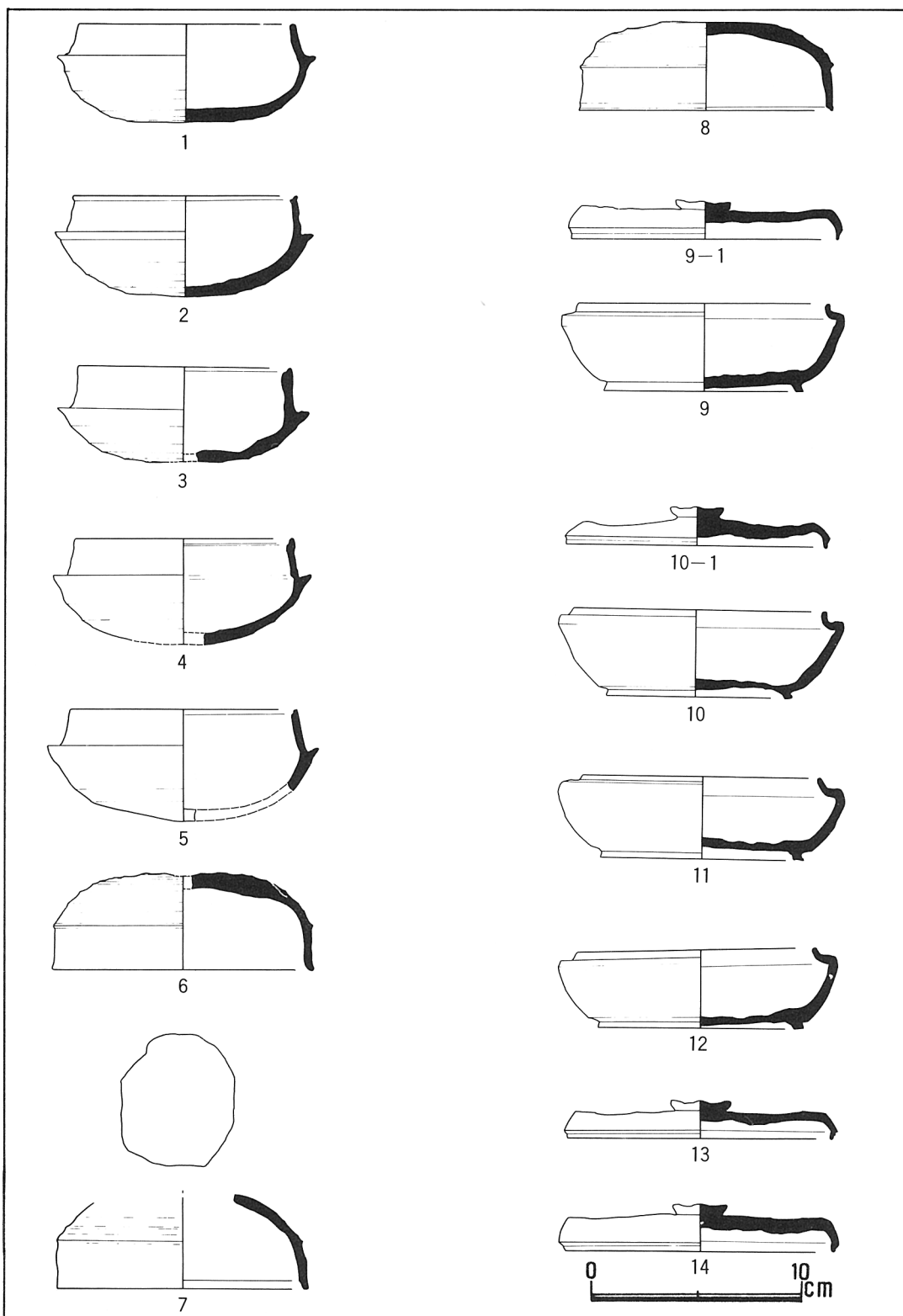
2は、器高4.7cm、口径10.6cmを測る完全品の杯身である。立ち上がりは丸味をもって内湾し、口縁端部は段を有する。受部は水平にのび、端部は鋭く三角形を示す。ロクロ回転は時計とは逆回りを示し、底部は篋による削りがみられる。底部内面は、細いハケ状工具による調整がおこなわれている。焼成は堅緻、色調は暗灰色を示す。胎土は、比較的大きめの砂粒を含んでいる。

3は、器高4.45cm、口径10.2cmを測る杯身の破片である。口縁部は内傾気味に立ち上がり、口縁端部は段を有する。受部はやや上方にのびる。ロクロ回転は時計回りを示し、底部は篋の削りがみられる。焼成は堅緻、色調は淡灰色を示す。胎土は黒く溶解し、気泡状となる粒子を含む。なお底部には、焼成後による穿孔がみられる。

4は、器高5.0cm、口径10.4cmを測る杯身である。内傾気味に立ち上がり、口縁端部は段を有する。受部はやや上方にのび、端面は平坦である。ロクロ回転は時計回りを示し、底部には篋による削りがみられる。焼成は堅緻、内面色調は灰色、外面色調は暗灰色を示す。胎土は比較的大きめの砂粒を含んでいる。なお、底部は焼成後による穿孔がなされている。



第7図 1号墳出土遺物（1/3）



第8図 1・8号墳出土遺物 (1/3)

5は、器高5.2cm、口径13cmを測る杯身の破片である。口縁部は内傾気味に立ち上がり、端面には段を有する。受部は外方に広がり、端面には凹部を有する。ロクロ回転は時計とは逆回りを示し、底部には篋削りがみられる。焼成は堅緻、内面色調は灰色、外面色調は暗灰色を示す。胎土は大きめの砂粒を含み、黒く溶解し、気泡となる粒子を含む。底部には、焼成後の穿孔がみられる。

6は、器高4.5cm、口径12.4cmを測る杯蓋の破片である。天井部は丸味をもち、稜は断面三角形を呈する。口縁部は直ぐに立ち上がり、端部は外反気味に丸くあげていく。ロクロ回転は時計回りと逆を示し、天井部に篋削りを施す。焼成は堅緻、内面色調は黒灰色、外面色調は灰色を示す。胎土は、大きめの砂粒を含む。

7は、器高4.6cm、口径12cmを測る杯蓋の完形品である。天井部は、焼成後による穿孔がみられる。稜は断面三角形を呈し、口縁部はやや外傾気味に広がり、端部は平坦となる。内側には、段をつくる。ロクロ回転は時計と逆回りを示し、天井部に篋削りを施す。焼成は堅緻、色調は茶灰色を示す。胎土は、細砂を含む。

8は、器高4.1cm、口径12.1cmを測る杯蓋である。天井部は平らで、稜は断面三角形を示す。口縁部はやや開き気味になり、端部外面に凹部を有し、内面には段をつくる。ロクロ回転は時計回りを示し、天井部には篋削りがみられる。焼成は堅緻、色調は灰色を示す。胎土は大きめの砂粒を含む。

第2節 2号墳（第2図）

発掘届に記載されていた古墳である。用地北に所在する古墳と北側を接しているが、調査の結果、切り合いは認められなかった。周溝は北側の土層断面に検出されたが、基盤層を若干掘り込む程度のものであった。さらに東―西土層断面に認められた第4層については、周溝と考えられる。しかし西側については、弥生期と考えられる柱穴状のものが掘り込まれており、明確な前後関係は土層観察においては把握できなかった。

盛土は第5層の暗黒褐色土である旧地表が認められ、その上に第2層黄褐色土がある。墓壇の切り込みは、この第2層から掘られている。このようなことから、当古墳の規模は径約11mの円墳と考えられ、盛土の高さは約75cmを測る。

主体部は、中央よりやや北西よりに第1主体部と南側に小形の第2、第3主体部が埋置されていた。第3主体部については、調査前において墳丘上に露出した状態であった。

第1主体部（第10図）

土壇掘り方255cm×172cm、石棺（内法）192cm×43cmを測る。蓋石は3枚認められた。側石は南西側が6枚、北東側が13枚存在する。北東側石は長さ45cm～35cmの角材状に整形した石材を

用いている。南西側においても一部用いられている。

石枕は南東部に置かれており、大きさは37cm×18cm、厚さ10cmを測る。石枕のほぼ中央部に「ㄩ」状に深さ1.5cm～2cmほどの凹部を設けている。床面は厚さ3cmほどにビシャモン石（この地域で呼称されているもので、結晶片岩系のものと考えられる。）及び小礫が敷かれていた。

骨は頭骨の一部が石枕に接して検出されたが、ハツカネズミの巣となっていたため原位置を止めていなかった。

出土遺物は南東側石の外側に接し、刀子と鉈が検出された。側石の上端面とほぼ同一の高さから検出されているので、石枕を埋置して外側の掘り方を埋めもどした段階か、蓋石をかぶせる前段階に置かれたものと考えられる。刀子を上にして検出され、その切先は北に鉈のそれは南に向かれて置かれていた。

刀子（第13図・2）

現存長9.6cm、茎2.7cm、刃部幅1.9cmを測る。切先は検出時において銹化が著じるしく、取り上げ時に欠失した。

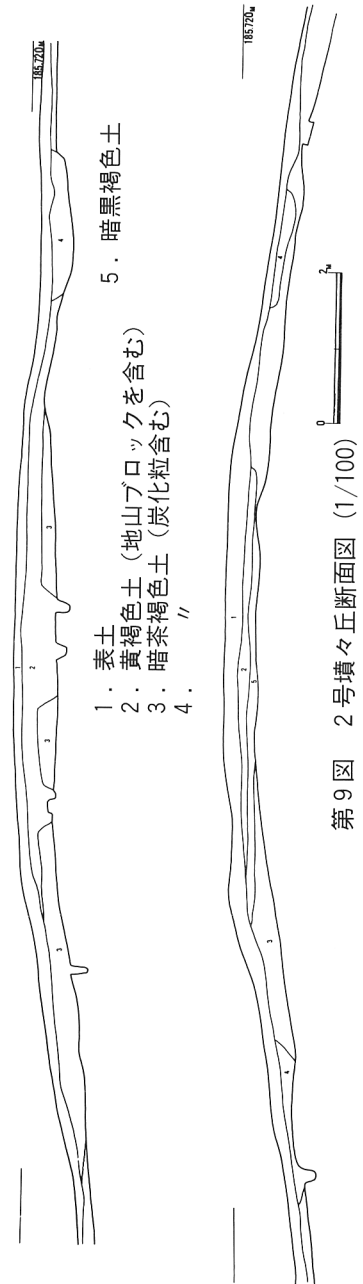
鉈（第13図・1）

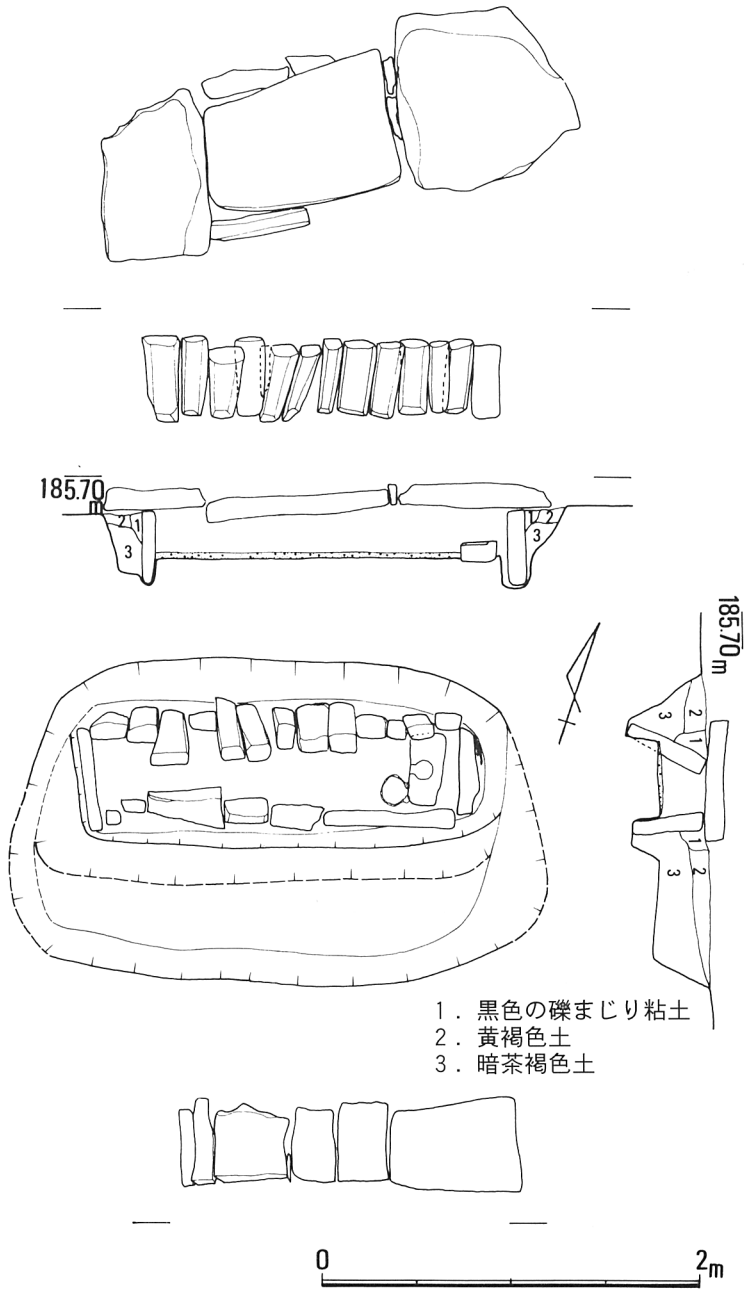
長さ8cm、刃部長1.5cm、刃部幅0.5cmを測る。遺存状態は非常に良好であった。

第2主体部（第11図）

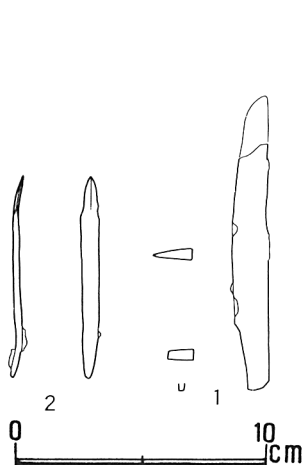
第1主体部の南東側にほぼ併行して存在する箱式石棺である。土壌掘り方103cm×66cm、石棺（内法）80cm×14cmを測る。蓋石は3枚より成り、両側石は平石1枚をそれぞれ用いている。床面は第1主体部と同様にビシャモン石と小礫を敷いていた。

第3主体部（第12図）





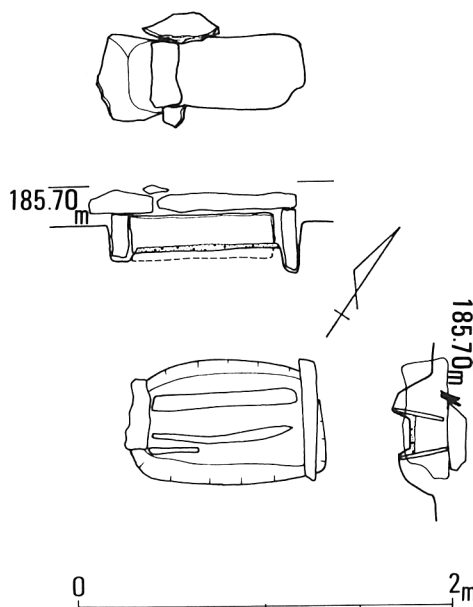
第10図 2号墳第1主体部 (1/40)



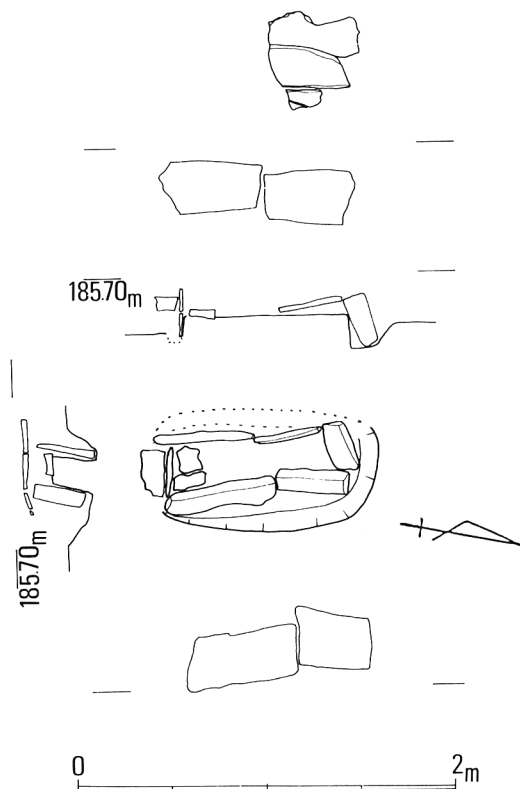
第13図 2号墳第1主体部出土遺物 (1/3)

第2主体部の北面側に位置し、調査前においてすでに墳丘上に露出していたものである。したがって、蓋石の一部が欠失している。土壙掘り方120cm×?、石棺（内法）85cm×18cmを測る。南部分に平石2枚を用いた枕が存在する。両長側石は、いずれも2枚よりなり、蓋石と床面との間は14cmほどである。

3つの内部主体の石材は、第1棺では主体部が砂岩を、第2主体部は結晶片岩を用いて構築されていた。



第11図 2号墳第2主体部 (1/40)



第12図 2号墳第3主体部 (1/40)

第3節 8号墳（第15図）

当古墳は、調査時地表面に石材が散乱している地点が認められたため、確認トレンチによって竪穴式石室が検出されたのである。古墳の名称については、山之城古墳群と同一丘陵上に所在することから8号墳とした。

石室は丘陵西斜面を南―北方向に掘り込み、平坦部をつくり、その平坦部に北・東・南側の地上面を掘り込んで石室を設けている。石室の規模は、長さ320cm、幅100cmを測るものと推測される。両側石は3段に積まれているのが認められるが、南東コーナーは側石と同様の石が認められることから、本来は3段以上に側石が積まれていたものと考えられる。短側石の北はすでに掘られており、南については平たい一枚石を立てて用いているのが確認された。

床面は幅約75cmほどの台状とし、その上にさらに厚さ6cmほどにナメラブロックを多く含む茶褐色土を敷いている。また床面は、北側が盗掘により失っているが、棺台のものと考えられる平石とその附近より釘が検出していることから、木棺が埋置されていたものと推定される。

副葬品は、棺台の北側に玉類と東側石よりに切先を北にして直刀が検出された。さらに、耳環が直刀の両側石よりと逆の東よりに検出された。いずれも出土状態から棺内副葬と考えるのが妥当であろう。

石室南短側寄り、床面から20cmほど上の埋土中より、短頸壺と蓋4個体が検出された。そのうちの2個体が蓋をした状態で検出された。埋葬の状態から火葬骨を入れたものと考えられる。

出土遺物

丸玉（第16図）

15個出土しており、大きさは2種類認められる。材質はガラス、メノウ、硬玉である。計測値は表1に示している。

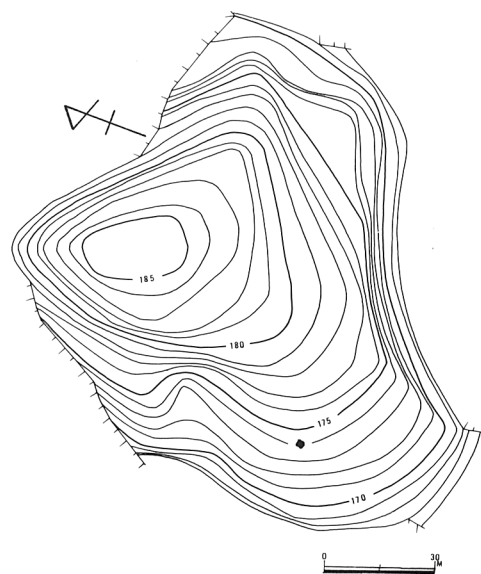
勾玉（第16図）

2個出土し、材質はメノウである。計測値は表1に示している。

耳環（第16図）

2個出土し、いずれも銅地に金張りである。両者とも遺存状態は極めて良好であった。

刀（第16図）

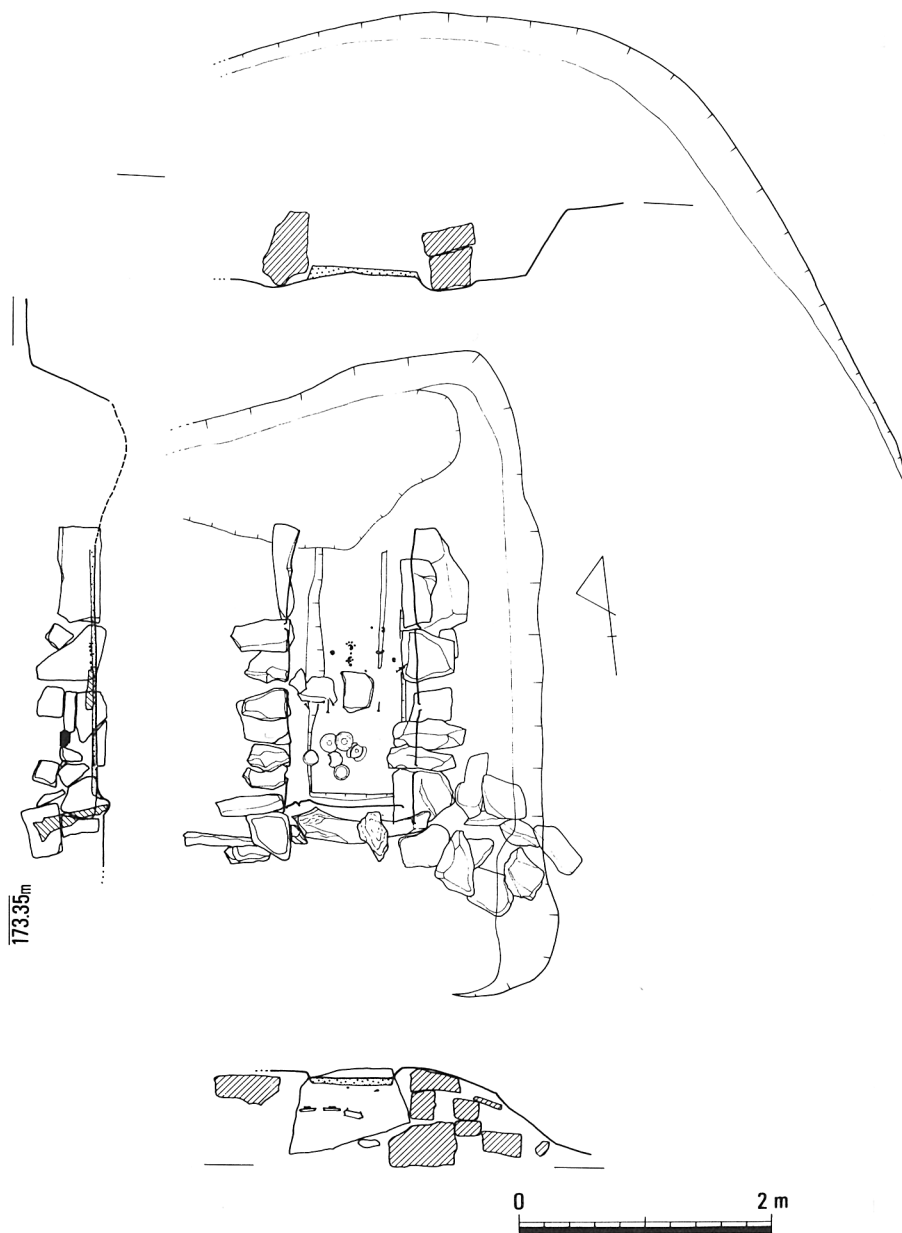


第14図 8号墳位置図（1/2000）

茎は棟区より3.8cmの所で欠失している。長さは80.5cmを測り、反りは見られない。鐔は着装状態で出土したが、側石の転落によりその状態を失っている。

須恵器（第8図・9～14）

9は口径11.95cm、器高4.1cm、高台径9.5cm、高台高0.4cmをそれぞれ測る。強く張る肩部



第15図 8号墳 (1/60)

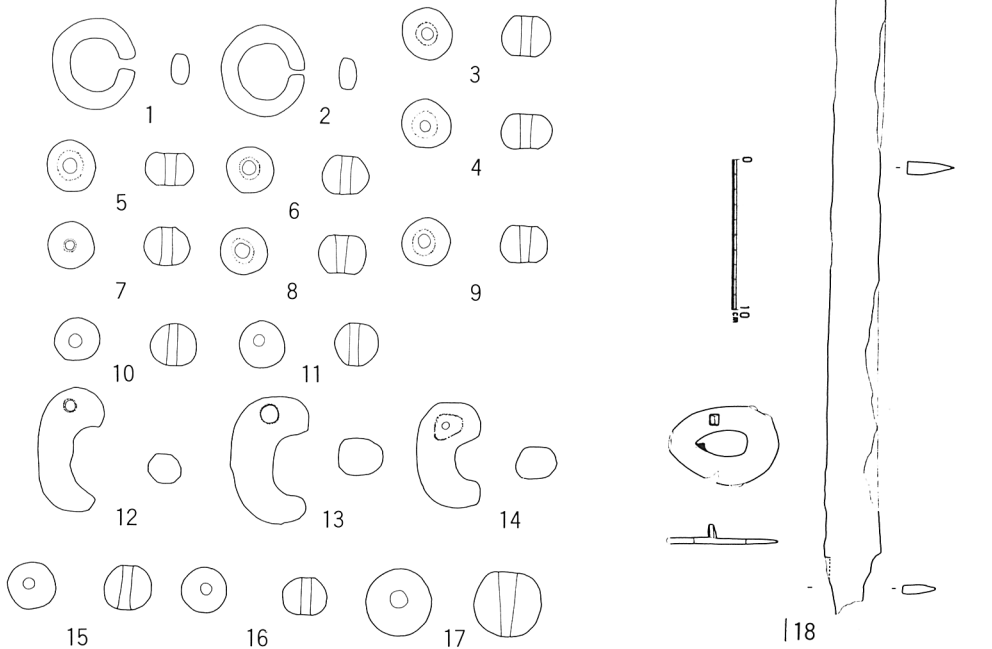
から内側に屈曲させ、端部を立ち上がらす。底部外縁に、
 外方へ張り出す高台を付す。整形は左回転のロクロによ
 り、胎土は石粒を多く含み荒い感を受ける。焼成は脆弱で
 ある。色調は淡茶灰色を示す。

10は口径12cm、器高4.1cm、高台径8.8cm、高台高0.4cmを
 それぞれ測る。他については、9と同一の内容を示す。

11は口径11.2cm、器高3.85cm、高台径9.65cm、高台高
 0.45cmをそれぞれ測る。他は9と同一の内容を示す。

12は口径11.4cm、器高3.5cm、高台径9.8cm、高台高0.3
 cmをそれぞれ測る。他は9と同一内容を示す。

9-1は9の蓋となるものである。口径12.7cm、器高
 1.4cm、つまみ径2.7cm、つまみ高0.45cmを測る。口縁部は
 内傾したのに垂直に下り、端部は内傾する凹部を呈する。
 天井部は、肩部よりやや低くなる傾向を示し、中央部に遍
 平な宝珠つまみを付す。他については、短頸壺と同一の内
 容を示す。



第16図 8号墳出土遺物 (1/2, 1/5)

第4章 まとめ

10-1は10とセットになるものである。口径12.4cm、器高1.8cm、つまみ径2.55cm、つまみ高0.5cmを測る。口縁部は内傾したのち垂直に下り、端部外面は凹状となる。天井部は肩から低くなり、中央に向かってやや高さをます。中央部には扁平な宝珠つまみを付す。他の胎土、焼成、色調とも9と同様の内容を示す。

13は、天井部を下にして出土したものである。口径12.6cm、器高1.8cm、つまみ径2.85cm、つまみ高0.4cmを測る。その他の胎土、焼成、色調とも前述したものと同様の内容を示す。

14は天井部を下にして出土したものである。口径12.7cm、器高2.2cm、つまみ径2.6cm、つまみ高0.45cmを測る。その他の胎土、焼成、色調とも前述したものと同様の内容を示す。

表1

番号	大きさ cm	形状	材質	重さ g	番号	大きさ cm	形状	材質	重さ g
3	1.35	円	ガラス	2.50	11	1.25	円	硬玉	2.66
4	"	"	"	2.34	12	3.3×0.95	コの字	メノウ	5.93
5	"	"	"	2.33	13	3.4×1.15	"	"	8.88
6	1.3	"	"	2.28	14	2.8×1.0	"	"	6.10
7	1.2	"	硬玉	2.40	15	1.35	円	硬玉	3.05
8	1.25	"	ガラス	2.35	16	1.20	"	"	2.00
9	1.35	"	"	"	17	1.8	"	メノウ	8.15
10	1.20	"	硬玉	2.10					

第4章 まとめ

山之城古墳群の調査は、最終的に3基の古墳を記録して終了した。これら古墳から出土した遺物から、造られた年代について若干の検討を加えてまとめとしたい。

1号墳出土の須恵器は、埋葬後の墳丘祭祀に用いられたと推測される。このことは、3・4・7に認められる焼成後の穿孔がなされていること、5と6における意識的な打ち欠き部分と解る部位があることなどから判断される。

この須恵器と時期的に近いと考えられる遺物が谷尻遺跡（註1）から出土している。同遺跡の報告で分類されているAタイプに近い内容を示すものである。口径及び最大径からすれば、山之城1号墳のそれは小振りの分量を示している。

この他に1号墳からは、時期を考える上で参考となる特徴的な鉄鏃が20点出土している。この鉄鏃は、後藤守一の分類（註2）によれば棘篋被鑿箭式とされるものに近い形態を示しているのである。この篋被ぎの長いのは共通するが、他の部位については相違点が見られるのであ

る。

5・8・16を除くものについては、鏃の部分に抉りが存在し、その下から長い逆刺が付されている。両側に付されているものは、この抉りが認められない4がこれに相当する。5・16は、抉りが見られないもので逆刺がつく。これら特徴的な鏃について、管見される出土例が見られるものについて、具体的に検討していきたい。

総社市の法蓮40号墳（註3）は、箱式石棺を主体部とする円墳である。鏃の出土位置は、墓壙掘り方の外側で検出され、A群とB群とに分かれていた。このうちの後者の鉄鏃中のNo.11がこのタイプに相当する。報告書の図中においては、逆刺と見られる部分が銹化により判然とし難いが、図版からすればこのタイプとして認められるのである。

真庭郡八束村の四つ塚1号墳と、同3号墳（註4）から出土している。1号墳は、横穴式石室を有するものである。このタイプの鉄鏃は、5点図示され、形状的には相違は認められないが、棘状突起が存在することが違いとされよう。13号墳は2基の木棺直葬が認められ、そのうちのB主体から出土している。1号墳に認められた棘状突起は、木質の遺存により図示されていない。

笠岡市の長福寺裏山古墳群（註5）中の全長約50cmの前方後円墳である東塚から出土している。前方部の竪穴式石室からの出土である。図中からは、棘状突起を持たないものと見られ、特に篋被ぎにねじりが認められる特異な形状を示している。

この他に県外における出土例は、広島県広島市禅昌寺遺跡（註6）、大阪府南河内郡河内黒姫山古墳（註7）、奈良県橿原市新沢千塚古墳群（註8）の116・115・173の各古墳から出土していることが知られている。

以上、山之城1号墳とほぼ同じタイプの鉄鏃が出土する古墳についてみてきたが、これらの古墳について他の伴出遺物などから5世紀から6世紀の間におさまるものと理解されるのである。このうち、四つ塚1号墳の6世紀代に入るものが最も新しい段階のものである。他の出土した古墳については、6世紀には達しない時期と理解される。

このようにみていくと、山之城古墳出土の鉄鏃も他と同様に考えることができ、伴出の須恵器と相まって5世紀末から6世紀初めの時期と考えるのが妥当であろう。また、山之城2号墳についても、1号墳と相前後した時期と考えられるのである。

次に、8号墳については、石室に伴う土器がないため時期を決め難い。追葬として火葬骨を入れたと推定される須恵器が出土している。この須恵器の短頸壺と蓋のうち前者については、久米郡久米町宮尾遺跡（註9）と邑久郡長船町西谷遺跡（註10）から出土している。前者は、V区から出土したもので高台がまだふんばり、端部が太いなど古い様相を示している。後者は、No.15土壙から出土したもので宮尾遺跡のものより端部の太さがなくなるなど新しい傾向がみ

第4章 まとめ

られる。西谷遺跡は、他の伴出遺物などから8世紀前半とされ、宮尾遺跡のそれはより古くなるであろう。この二遺跡と比較すると、体部の扁平化、高台端部の単純化などにより新しい様相を示している。さらに、蓋についても宝珠の扁平化などと合せて考慮するならば、前述したいずれの遺跡よりも新しいと解されるのである。

このように追葬の時期が明らかになったが、石室の時期については、この追葬が行われた時点では既にかかりの流土によって石室内が埋もれた状態であったことが明らかとなっている。したがって、追葬の時石室内に約20cmの流土が入る時間と、追葬する場の石室が墓所として意識されている時間との2つの時の要素が存在していたことになる。そして、この時間の幅だけ時期を古くすることができるのである。

註

- 1 岡山県教育委員会「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」(11) 1973年
- 2 後藤守一「上古時代鉄鍬の年代研究」 人類学雑誌第54巻4号 1939年
- 3 総社市教育委員会「総社市埋蔵文化財発掘調査報告」4 1987年
- 4 近藤義朗「四つ塚1号墳」「四つ塚13号墳」 岡山県史第18巻考古資料 1966年
- 5 長福寺裏山古墳群・関戸廃寺址調査推進委員会「長福寺裏山古墳群附関戸廃寺跡」 1965年
- 6 禅昌寺西遺跡発掘調査団「広島市戸坂町禅昌寺西遺跡発掘調査報告」 1980年
- 7 大阪府教育委員会「河内黒姫山古墳の研究」 1953年
- 8 奈良県立橿原考古学研究所「新沢千塚古墳群」 1981年
- 9 岡山県教育委員会「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」(4) 1973年
- 10 岡山県長船町教育委員会「西谷遺跡」 1985年



上水田盆地を望む（南西から）



1. 八幡町附近を望む (西から)



2. 1号墳調査前 (北から)



1. 1号墳主体部（南から）



2. 1号墳主体部蓋石除去後（北から）



1. 1号墳第1主体部石枕（俯瞰）



2. 1号墳剣出土状態（俯瞰）



1. 2号墳主体部（南から）



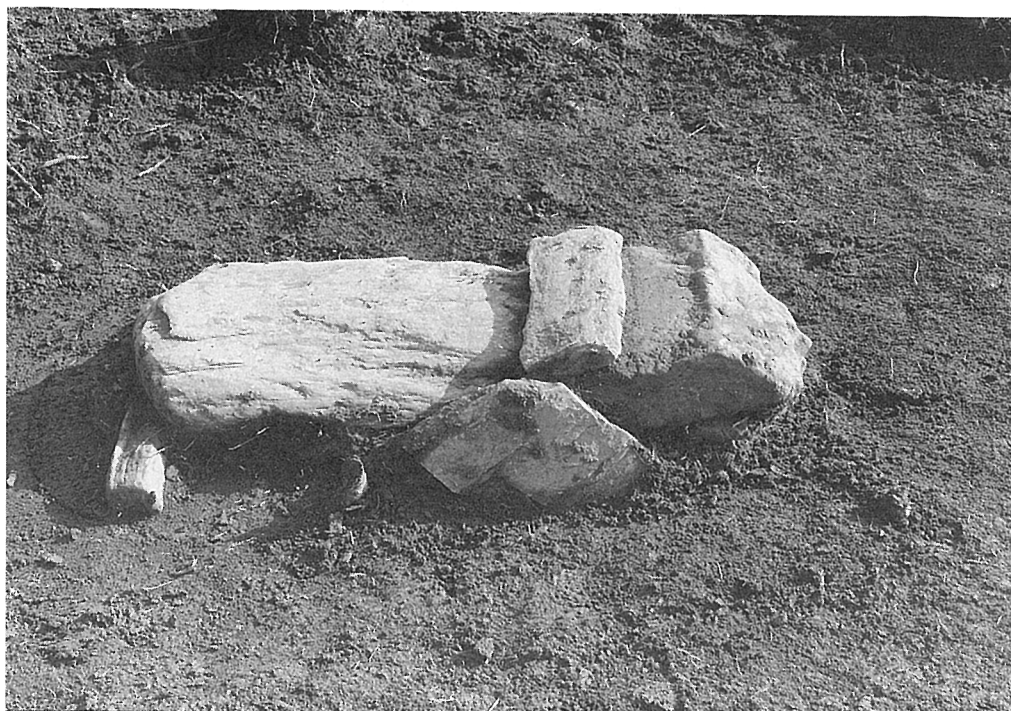
2. 2号墳主体部掘り方（南から）



1. 2号墳第1主体部（南から）



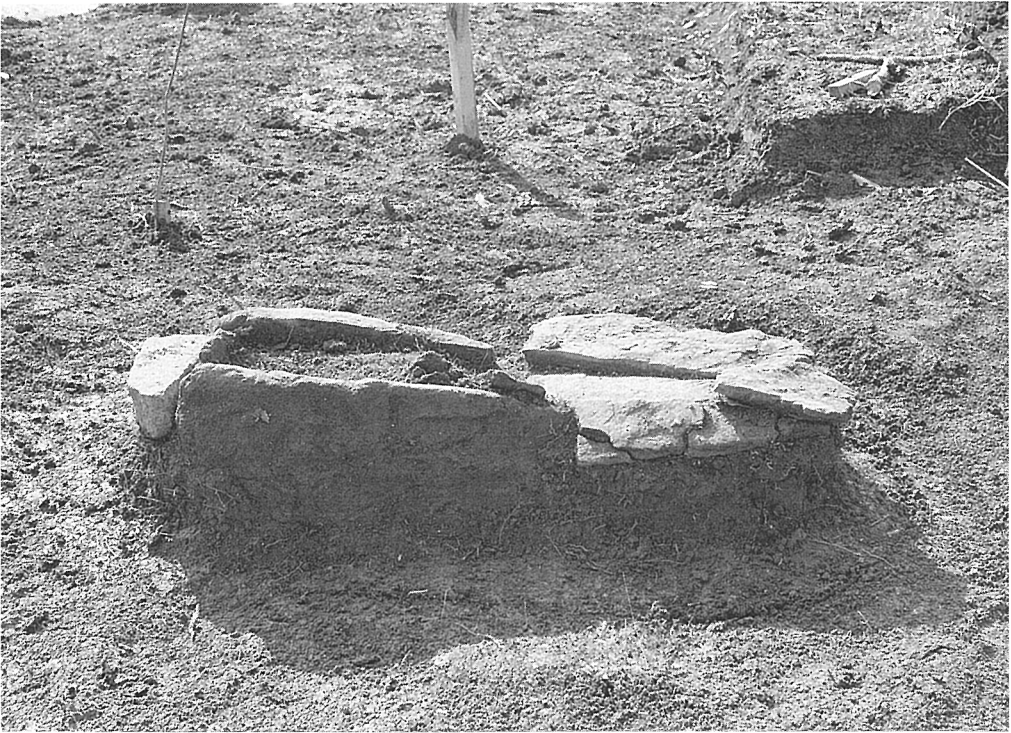
2. 2号墳第1主体部蓋石除去後（南から）



1. 2号墳第2主体部（北東から）



2. 2号墳第2主体部蓋石除去後（南東から）



1. 2号墳第3主体部（東から）



2. 2号墳第3主体部蓋石除去後（西から）



1. 8号墳遺物出土状況（北から）



2. 8号墳石室（北から）



1. 8号墳遺物出土状況（俯瞰）



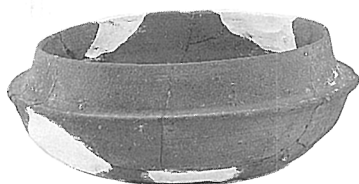
2. 8号墳遺物出土状況（俯瞰）



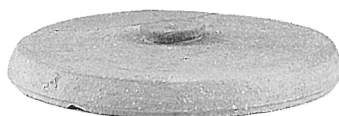
2



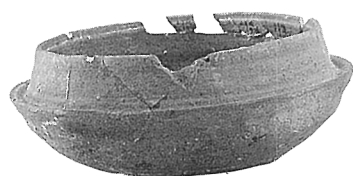
7



1



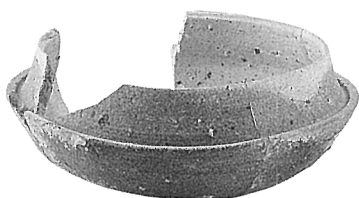
13



3



14



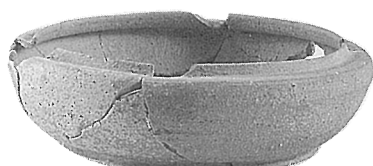
5



11



8



10

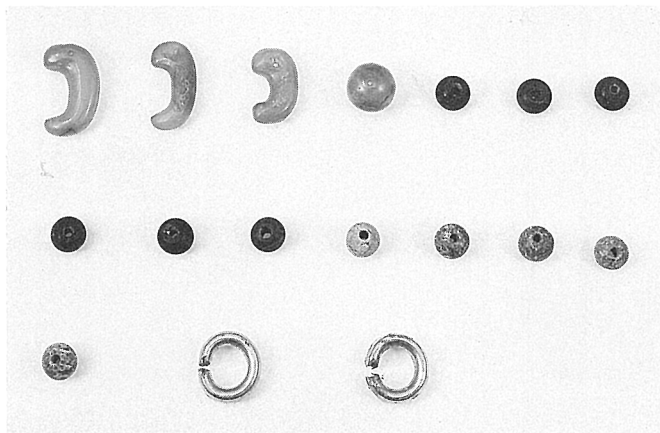
出土遺物 (1)

图版12

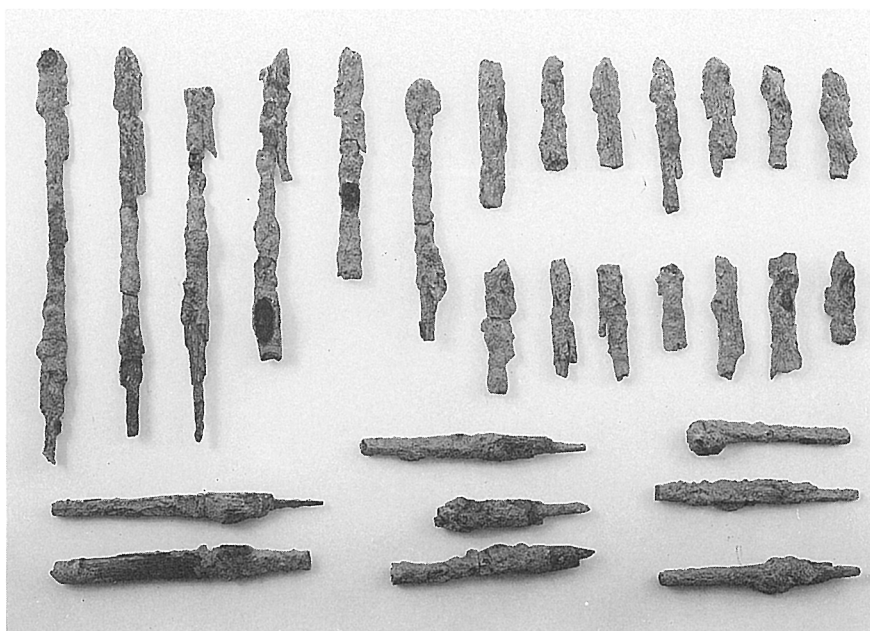
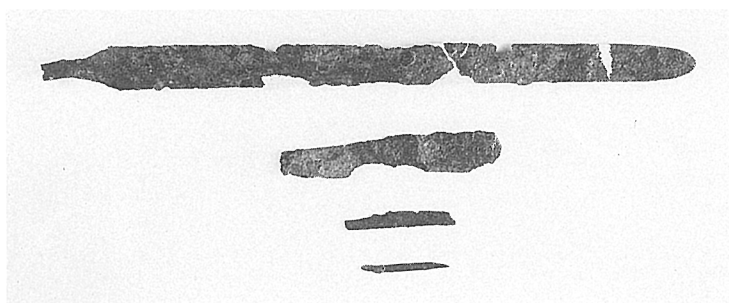
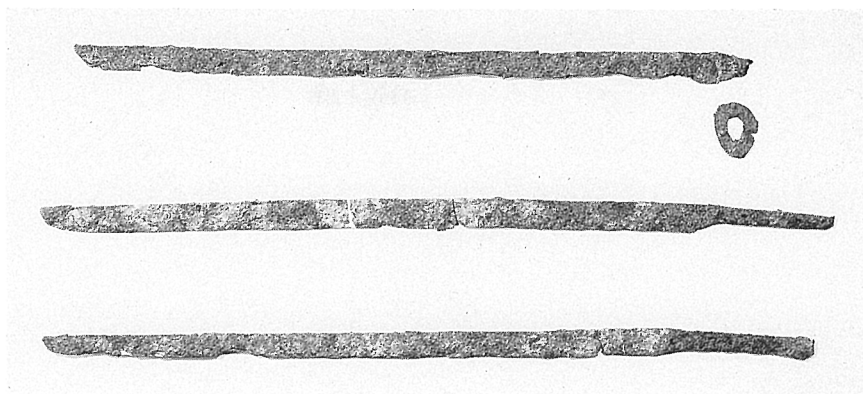
10-1



9-1



出土遺物 (2)



出土遺物 (3)

北房町埋蔵文化財発掘調査報告 6

山之城古墳

昭和62年11月1日 印刷

昭和62年12月1日 発行

編集 北房町教育委員会

印刷 西日本法規出版株式会社

